

近代日本における「学歴エリート」の中学教師像

—『私の履歴書』の分析から—

濱 貴子

Highly Educated People's Images of Junior High School Teachers in Modern Japan
Analyzing "Watashi no Rirekisho"

Takako HAMA

1. はじめに

今も昔も、大学をはじめとする高等教育機関に入学するまで、学校は試験を中心とする競争と淘汰の場である。その意味で、戦後から現在ならば高等学校が、そして戦前ならば旧制中学が、学歴を通じた「成功」を達成する上で、最も重要な選抜を控えた「大切な時期」であった。特に、どの高等教育機関を卒業したかということが社会に出た後に明確な賃金差となってあらわれていた戦前においては、その選抜の重要度は「学歴エリート」を目指す者自身やその周囲に強く認識されていたことだろう。

これまで行われてきた一連の社会史的・歴史社会学的な旧制中学に関する研究も、高等教育機関への進学を前提とした「進学準備機関」としての中学校の成立と変容をそれぞれの切り口から明らかにして来た。深谷（1969）は近代日本の「学歴主義」の成立を論じるなかで、また天野（1982、1983）近代日本における選抜＝試験システムの確立を論じるなかで旧制中学への言及を行っている。また、受験生に注目し、その立志・苦学・出世の心性を論じた竹内（1991）や、明治後期の旧制中学校における日常的な教育実態を「競争と管理」という側面から明らかにした斎藤（1995）、そして近代化＝上京に注目し、東京の私立中学校の果たした役割とその変容を論じた武石（2012）などの研究が蓄積されてきている。

このように、従来の旧制中学研究は、主に選抜・競争と淘汰の文脈で論じられてきたのであるが、これまでの研究では、その選抜・競争と淘汰の旧制中学の生活のなかで教師と生徒がどのように関わりあっていたのか、特に生徒の中学教師像という点に関しては、中心的テーマとしてあまり扱われてこなかった。旧制中学の教師像に関しては、斎藤（前掲書）で「生徒管理」との関連で「生徒管理」組織の統括者としての校長（p.225）や、石岡（2008）で感銘・影響を受けた中学教師があつかわれている（p.211-212）が、いずれも部分的な言及にとどまる。

本稿は、旧制中学における教師－生徒関係に、「学歴エリート」の中学教師の思い出という側面から、日本経済新聞紙上で1956年から連載されている自伝的読み物である『私の履歴書』を資料としてアプローチする。学歴エリートは自伝においてどのような中学教師像をどのような文脈で描くのか、そしてその描き方に選抜・競争と淘汰という旧制中学の日常世界はいかな

る影響を与えているのか。この問いに答えていくなかで、「学歴エリート」の旧制中学の生活世界における教師－生徒関係を明らかにしていきたい。

2. 資料と方法

2. 1. 資料

本稿で分析の対象とした資料は、日本経済新聞紙上で連載が開始された 1956 年 3 月から 2008 年 12 月までの間に『私の履歴書』に掲載された日本人男性 561 名のうち、旧制中学に進学した 389 名の自伝である。資料には、日本経済新聞社編『私の履歴書 経済人』（1・38 巻）、日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人』（1・20 巻）、日本経済新聞縮刷版（1982-2008 年）を主に用い、さらにそこからもれたケースについては日経ビジネス人文庫『私の履歴書』シリーズ各巻を用いて補足した。

『私の履歴書』には、戦前・戦後を通じて政治・経済・文化の各分野の第一線で活躍した人物の自伝が掲載されている。1956（昭和 31）年に日本経済新聞の文化欄のコーナーとしてスタートしてから現在まで、750 名を超える人物が執筆者として登場している。各執筆者はそれぞれほぼ一ヶ月にわたって自己の半生を記述する。そこでは、出生地や幼少時の家族関係、学校生活、軍隊経験、結婚生活、就職や職業にまつわるさまざまな経験やエピソードとともに、学校時代に会った先生とのエピソードも豊富に記述されており、旧制中学の教師も数多く登場している。よって、旧制中学における教師－生徒関係を検討するために、『私の履歴書』は資料として好適であるといえよう。

表 1. データの概要

変数	N	%	変数	N	%
掲載時年齢			本人職業		
90代	5	1.3	会社経営者	183	47.0
80代	71	18.3	専門職	61	15.7
70代	211	54.2	芸術・芸能	53	13.6
60代	92	23.7	文筆	50	12.9
50代	10	2.6	政治家	26	6.7
計	389	100.0	官僚	16	4.1
出生年			計	389	100.0
1871-90	57	14.7	出身階層		
1891-10	164	42.2	上	67	17.2
1911-30	153	39.3	中の上	229	58.9
1931-50	15	3.9	中の下	75	19.3
計	389	100.0	下	8	2.1
掲載時期			不明	10	2.6
1956-1975	155	39.8	計	389	100.0
1976-1995	149	38.3	最終学歴		
1996-2008	85	21.9	高等教育	360	92.5
計	389	100.0	中等教育	29	7.5
出身地			計	389	100.0
東京	116	29.8	高等教育：大学		
地方大都市部	37	9.5	帝大	219	60.8
地方市部	89	22.9	官公立専門学校	61	16.9
地方郡部	147	37.8	私大	80	22.2
計	389	100.0	計	360	100.0

データの概要は、表 1 の通りである。掲載時年齢、出生年（20 年ごとのコーホート）、掲載時期（20 年ごと）、出身地、本人職業、出身階層、最終学歴、そして最終学歴が高等教育のケースに限定して高等教育機関の種類によってそれぞれ分類している。出生年は、1890 年代から 1920 年代生まれを中心に 1875 年生まれから 1933 年生まれまで含まれている。職業別にみると会社経営者が 47.0% と約半数を占めていること、また、

高等教育進学者が 92.5%と高学歴であり、帝大がそのうちの 60.8%を占めることが特徴である。

2. 2. 方法

先生の思い出の分析には、主に、各著者の①自伝における「先生」の思い出の記述量、②自伝に登場する先生数の 2 つの指標を用いた。まず、各著者の自伝全体のなかから、著者にとって「先生」、「師」と呼べる人物の名前を抽出し、人数を数えた。次に、各先生（師）についての思い出の該当箇所の行数を数えた。この 2 つの指標を用いて、旧制中学の先生の思い出の有無と職業や学歴などの属性との関連性を量的に分析するとともに、自伝に登場する先生のうち、最も厚い思い出の記述をされている教師が特定の旧制中学教師であるケース（65 ケース）を抽出し、その教師の思い出の内容を質的・量的に分析した¹⁴。

なお、自伝を書くということは「個性的であり、きわめて主観性に彩られている記憶の中から、読者を意識しつつ、描くべき内容を選び取っていくという営み（小山・太田、2008、p13-14）」であり、そこに描かれたことからは「実態を反映していると同時に、語られる時点での個人的な状況や社会的規範を反映した思い出の再構成（稲垣・濱、2013）」である。よって分析に際しては、教師―生徒関係の実態の検討と同時に、語られた時点での社会状況、さらにはかねてより日本のクオリティ・ペーパーといわれ、購読世帯の平均世帯年収や学歴が他の主要全国紙に比べて高く、企業幹部との親和性も強い（第 11 回全国新聞総合調査 2011）という日経新聞における連載であるという場の特性も考慮したい。

3. 思い出のなかの中学教師像

3. 1. 中学教師の思い出の有無

表 2. 中学教師の思い出の有無

変数	N	中学教師の思い出		
		有	無	有%
本人職業				
会社経営者	183	104	79	56.8
専門職	61	49	12	80.3
芸術・芸能	53	31	22	58.5
文筆	50	28	22	56.0
政治家	26	14	12	53.8
官僚	16	8	8	50.0
計	389	234	155	60.2
最終学歴				
高等教育	360	224	136	62.2
中等教育	29	10	19	34.5
計	389	234	155	60.2
掲載時期				
1956-1975	155	103	52	66.5
1976-1995	149	85	64	57.0
1996-2008	85	46	39	54.1
計	389	234	155	60.2

まず、旧制中学に通った『私の履歴書』執筆者のうちどのくらいのケースに中学教師の思い出の記述があるかということについて、全体的な特徴と属性別の傾向を量的に概観しよう。表 2 は旧制中学教師の思い出の有無を属性別に示したものである。なお、ここでは意味のある差異が確認できた変数のみを掲載した。

全体的にみると、旧制中学に通った 389 ケースのうちの 60.2%となる 234 ケースが何らかの中学教師の思い出を記述していることがわかる。

ただし、中学教師の思い出の記述があるかどうかということについては、職業と学歴によって大きな差がある。職業に

ついていえば、専門職は中学教師の思い出の記述のあるケースが 80.3%と他の職業に比べて顕

著に高く、中学教師の思い出が回想されやすい職業であるといえよう。一方で、政治家や官僚は中学教師の思い出を記述する割合が約5割と低い。ここには本人の職業と学問知との関連の強さの差が表われていると考えられる。専門職はその職業と学問知の関連が強く、その伝達者である教師の思い出も記述されやすいと考えられる。一方、官僚や政治家はその職業と学問知との関連は弱く、よってその伝達者である教師との思い出も記述されにくいことが推測される。

学歴についていえば、学歴が高等教育のケースはその6割が中学教師との思い出を記述しているのに対し、中等教育のケースはその半分の3割にとどまる。「中等教育は、競争原理に基づく淘汰機関で、健康、経済力、学力の三拍子に恵まれなければ中学校卒業は困難であった」と深谷(1974, p.1081)も指摘するように、中学を卒業した後の高等教育への進学と家庭の経済状況は深く関連していた。実際、「貧乏は相変わらずであった。月謝を納める頃になると校門に生徒監がいてはいれない。父は半分だけ金をくれる、明日また半分持ってくる」と言えという。

(『私の履歴書 文化人 第8巻』, p.26)、「私が辛うじて中学を卒業したのは、半分は投書をして五十銭二十五銭賞金をかせいだからである。(同書, p.27)」と中学時代を振り返る画家の中川一政(私立錦城中学卒)のように、学歴が中等教育の執筆者の中学時代の思い出をみると、家計が苦しかったために進学できなかったとの回想が頻繁にみられる。このような経済的要因のために退学のリスクと常に隣り合わせである日常のなかでは、中学校へのコミットメントは低く、それが中学教師との思い出を記述する割合の低さにもあらわれていると考えられる。

また、掲載時期が現代に近づくにつれ、中学教師の思い出を記述する割合が低下していつていることもみてとれる。これは、稲垣・濱(前掲論文)でも考察されているように、1970年代後半から1980年代前半にかけては、学校暴力や不登校などの学校問題や教育問題がメディアを通して顕在化していった時期であり、また近年に近づくにつれて教師という職業は聖職視されなくなり、世俗化が進んでいる。そのなかで、「先生」との実際の関係の変化とともに、教師との関係を語ること自体が時代の空気にそぐわなくなり、社会の中で教師の思い出を語ることの意味が薄れて行き、その影響が中学教師の思い出の記述にも及んでいるのであろう。

以上をまとめると、中学教師の思い出は旧制中学経験者全体の約6割によって回想されており、また、職業や学歴、掲載時期によって思い出の有無に差があることがわかった。

3. 2. 教師像の4類型

これまでは、『私の履歴書』の執筆者のうちどれくらいの割合で中学教師の思い出の記述がなされているかということを全体的・属性別に確認してきた。では、中学教師の思い出の記述があるケースでは、どのような中学教師の思い出がどのように描かれているのだろうか。以下ではこの点について検討を進める。なお、検討を進めるにあたって、以下では、旧制中学に通った執筆者389ケースのなかで、自伝に登場する先生のうち最も厚く思い出を記述されている教師が特定の中学教師である65ケースを抽出し、その教師の思い出の内容を分析した^②。

各執筆者の先生との思い出を読みこんでいくと、思い出のなかの中学教師像は、執筆者がその教師に対してどのような印象・感情を抱いているかによって、すなわち「先生への敬意」の有無と、「先生への愛着」の有無によって次の4つのタイプに類型化できた(図1)。

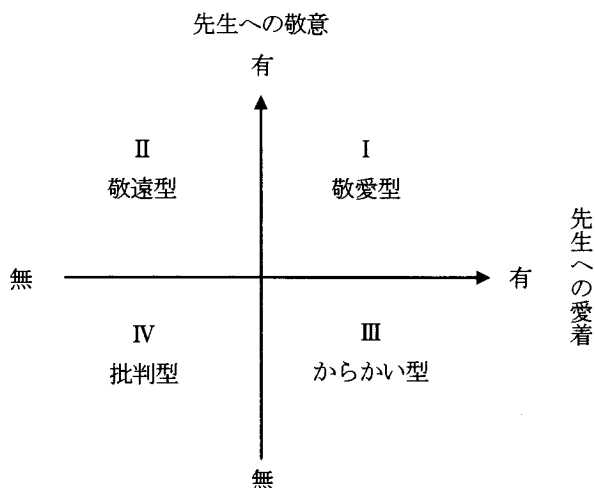


図1. 教師像の4類型

表3. 教師類型の内訳

敬愛		敬遠		からかい		批判		計	
N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
44	67.7	6	9.2	5	7.7	10	15.4	65	100.0

第一のタイプは、執筆者が敬意も愛着もともに抱いている教師であり、「敬愛型」と名付けることができる。第二のタイプは、執筆者が形式的に敬ってはいらぬものの愛着はなく、どちらかといえば距離を置いている教師であり、「敬遠型」と名付けることができる。第三のタイプは、執筆者にその教師に対する愛着はあるものの、敬意がなく、小馬鹿にしたり、からかいの対象となったりしていた教師で、「からかい型」と名付けることができる。最後に第四のタイプは、執筆者にその教師に対する敬意も愛着もなく、逆に批判的なまなざしが注がれ、執筆者の反抗・反発の対象となった教師であり、「批判型」と名付けることができる。

これら4つの教師類型に該当するケース数の内訳を示したものが表4である。表4をみると、最も該当する割合が高かったのは「敬愛型」であり、全体の67.7%を占めていた。これは、学歴エリートは基本的には学校卒業後の社会的地位の獲得において学校的恩恵（庇護）を受けているため、向学校的な傾向にあり、それが教師の思い出にもあらわれているためであると考えられる。次は「批判型」であり、15.4%であった。他の2つの類型への分布はそれぞれほぼ同程度で、「敬遠型」9.2%、「からかい型」7.7%であった。

教師に対するこのような4つの印象・感情は教師のどのような側面から立ち上がるものなのだろうか。以下では各類型の中学教師像について事例を参照しながらより詳細に検討して行く。

3. 3. 各類型の教師との関わり —事例から—

I. 敬愛型

まず、敬愛型の教師像からみていこう。敬愛の対象として回想される教師像は、「関わり方（個

別的⇔集団的)」と「伝達された知（学問知⇔暗黙知〔その後の行動指針となる言葉・行い〕）」を軸として、「個別的に目を掛け、可愛がってくれた教師（個別的関わり、学問知+暗黙知）」、「集団的な関わりの中で、その後の行動指針となるような言葉・行いを授けてくれた教師（集団的関わり、暗黙知）」、「授業において深い知識・教養を感じた教師（集団的関わり、学問知）」の3つのタイプに分けられた。

表4. 「敬愛型」における具体的教師像の内訳

	個別的に可愛がってくれた教師		集団的関わりの中で後の行動指針となる言行を授けてくれた教師		授業で深い知識・教養を感じた教師		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
計	22	50.0	15	34.1	7	15.9	44	100.0

表4はこの3つのタイプの内訳である。「個別的に目を掛け、可愛がってくれた教師」の割合が最も高く、全体の半分を占めていた。その次に割合が高かったのは「集団的関わりの中で後の行動指針となる言葉・行いを授けてくれた教師」で34.1%を占めていた。「授業で深い知識・教養を感じた教師」の占める割合は最も低く15.9%であった。以下にそれぞれのタイプを事例とともに詳しく検討して行こう。

①個別的に目を掛け、可愛がってくれた教師

第一は、個別的に目を掛け、可愛がってくれた教師である。関係のはじまり方には、中学在学時から先生に特別なものを感じ、執筆者の方から積極的に直接的関わりを持つようになった場合と、教師の方が執筆者に何かを感じて声を掛けた結果、関係がはじまる場合の2パターンがあるが、このタイプの教師との関わりは日常的・全体的なものとなる場合がほとんどである。

授業中や学校における関わりだけでなく、休日に先生の家遊びに行ったり（庄野潤三〔作家、大阪県立住吉中学→大阪外語→九州大学卒〕など）、放課後に特別な受験指導を受けたり（河田重〔日本鋼管社長、茨城県立龍ヶ崎中学→四高→東京帝大法学部卒〕、江戸英雄〔三井不動産会長、茨城県立下妻中学→水戸高校→東京帝大法学部卒〕など）、裕福な家の家庭教師の口を紹介してもらうなど苦学の経済的支援を受けたり（芹沢光治良〔作家、静岡県立沼津中学→一高→東京帝大経済学部卒〕など）、さらには卒業後も生涯を通じて交流が継続される場合もある（東条猛猪〔北海道拓殖銀行会長、高知県立城北中学校→高知高校→東京帝大法学部卒〕など）。したがって、伝達される知も授業中における学問知とその他の日常生活の場面で伝達される言葉や行いといった暗黙知と両方が伝達される。また、その先生との出会いが現在の職業につくきっかけになったケースもみられる（西條八十〔詩人、早稲田中学→早稲田大学文学部卒〕など）。

このように教師との関わりは全体的で親密なものであるため、このタイプの教師を挙げる執筆者は、「ずいぶんお世話になり、それだけに影響されるところも大きかった（河田重、『私の履歴書 経済人 第2巻』、p.435）」といった自己形成におけるその教師からの影響の大きさを表明する場合が少なくない。

典型的な例は、高杉晋一（三菱電機相談役、土浦中学→二高→東京帝大法学部卒）の北吟吉先生（当時土浦中学英語教師、のちに政治家〔衆議院議員〕）の思い出である（『私の履歴書 経済人 第8巻』、p.136-141）。

北先生は高杉にとっての「中学時代で忘れられない教師」として描かれる。先生は早稲田大

学を卒業したばかりで、「器械体操と剣道、詩吟が得意だった。また哲学を専攻しただけに、言うことが思想的、理論的で、しかも行動力があり、「担当の英語の時間内でも有名なクラーク博士の「青年よ大志を持て」の句を引用したりして、人間は小成に安んじてはいけないと力をこめて説き、「これまでの型にはまった先生たちとは全く違った存在」であったという。

また、北先生は、高杉と高杉の友人である岡野保次郎（後の三菱重工業社長）に進学の道が開けると、「それじゃ、一発ではいれるところをねらおうじゃないか。一高は無理だろうから二高にしよう。それにしても君らはどうも英語の力が足りない。二人とも私の家へ泊まり込んで勉強しろ。」と、先生の家で英語の個人教授を授けてもらう。そのおかげもあって 2 人は無事二高の入試を通過し、東京帝大に進むこととなる。その後「社会に出てからも、機会あるごとに先生をたずね、先生がなくなるまで親しくご交際を願」い、「思想面、芸術面、あるいは社会問題など、人間形成のうえで多くの啓発を受けた」という。このような関わりを振り返り、高杉は「私が今日あるのは、北先生の師恩にあずかるところ大である。深く感謝の意をささげる。」と自己形成における北先生の影響の大きさを表明している。

②集団的な関わりの中での、その後の行動指針となるような言葉・行いを授けてくれた教師

敬愛の対象となる教師の第二のタイプは、集団的な関わりの中での、その後の行動指針となるような言葉・行いを授けてくれた教師である。個別的な関係も取り結んでいたかもしれないが、回想の中でのその部分にはほとんど触れられず、集団的な関わりの中での教師の発した特定の言葉や、特定の方向に生徒の行動を導く教師の教育方針を中心に回想がなされる。また、このタイプは、在学中というよりもむしろ卒業後にその教師の言葉や教育方針のありがたさを再認識したといったことが同時に表明される場合が多い。

執筆者たちに思い出される教師の言葉をいくつかみてみよう。賀来龍三郎（キャノン会長、青島中学→五高→千葉工大→九州大学経済学部卒）にとってその言葉は、青島中学三年のときに、数学と物理を教わった秋山先生の指導方針である「公式を暗記してはいけない。公式はすべて自分で導き出せ」であった（『私の履歴書 経済人 第 29 巻』、p.318）。以来この言葉を信奉し、「現在まで私の行動指針になっている」ことを回想している。特に、「社会に出て、先生の言葉の正しさが理解できた」という。「仕事の上で解決しなければならない問題は多いが、公式のようにあらかじめ用意された答えはない。自分なりに考え、自分の公式を作っていくしかないのである。一月でも一年でも、じっくり考えて解答を求めることの大切さを知ったのは、秋山先生のおかげであった。」

さらには回想するなかで、教師の言葉が現在の職業を志すきっかけになったと位置づけている執筆者もいる。指揮者の岩城宏之（金沢県立第一中学→岐阜県立多治見中学→学習院中等科→学習院高等科→東京芸術大学音楽学部中退）は、中学一年の時に終戦を迎え、先生たちのいうことが「鬼畜米英」から「米英こそは民主主義のお手本である」とガラリと変わったことで「大人はウソつき」という結論に達し、そのような大人にはならないと固く決意していた。しかし、その先生たちのなかの一人が発した「これからの日本には、鉄砲を撃つ兵隊さんがいない。…だからお前たちは文化を通じて世界中に仲良くしてもらって、自分の生きる道を見つけるほかない」という言葉が、その後の自分の目標になったと次のように回想する。

「ぼくはこれに感動した。そしてなぜか、「そうだ、今に文化の兵隊さんになって、日本のために働こう」と、心に誓ったのだ。…なぜ「文化の兵隊さん」を志し、結局は音楽家になり、音楽の兵隊さんとして世界中を飛び回るようになったのか、本当に不思議である。だが、あの時の先生の一言が、ぼくの潜在意識として深く残ったのだと思う。(日本経済新聞文化欄『私の履歴書』、2003年10月20日付)」

一方、生徒の行動を導く教師の教育方針の典型的なものは厳しいしつけや校則に代表されるスパルタ教育であり、それを授けた教師として回想されるのは主に校長であった。例えば、野村與曾市(電気化学工業社長、東京府立第四中学→東京高商卒)は、当時の東京府立第四中学校の校長で、「スパルタ教育で有名な深井鑑一郎先生」に受けた教育を次のように回想している。

「私は深井校長から終生忘れ得ぬ薫陶を受けたものである。その一つが、厳格なしつけである。たとえば、服装の点でも、ズボンにポケットを付けてはいけない。体育は剣道と柔道を正課とし、運動部はテニス以外は禁制、むろん野球などもってのほかというぐあいであった。そのうえ、物忘れをやかましく言って、忘れた者は「遺忘届」を出さねばならず、これが一学期に三回以上重なると、成績が一段格下げになる。下校時には校門で守衛から下校時刻を生徒手帳に記入してもらい、それを保証人に確認してもらって、翌日再び守衛に差し出す等々、いろいろな校則があつて、校則については寸分の違背も許さなかった。特に弱ったのは、雨の日はゲートルを巻かねばならず、これがよく遺忘のタネになったのである。(『私の履歴書 経済人 第10巻』、p.62-63)」

しかし、このような厳しい教育方針は回想のなかで、「こういうやかましい校則があつたのも、深井校長が「本校は、将来、有為の人材をつくり上げる」という確固たる信念をもっておられたため、実際四中からは、有為の人材が多く輩出している。(同書、p.63)」と肯定的に解釈され直され、それを行った校長も敬愛の対象とされるのである。

同様に、宇佐美洵(日本銀行総裁、京城中学→慶応大学経済学部卒)も、当時京城中学校長の柴崎鉄吉を「すごいスパルタ教育が方針であつた。(『私の履歴書 経済人 第14巻』、p.14)」と回想するなかで、特に全校生徒を強行軍で山登りさせるという思い出に対して、「「ひでえことをさせるなあ」などと文句を言い合ったものだが、今では柴崎校長に心から感謝している。私が今もこうして元気でいられるのも、中学時代のあの猛烈な鍛錬のおかげだと思っているからだ。(同書、p.15)」と好意的にとらえ直している。

③授業において深い知識・教養を感じた教師

敬愛の対象となる教師の最後のタイプは、授業において深い知識・教養を感じた教師である。教師の持つ圧倒的な知識量(藤沢恒男[作家、大阪府立今宮中学→大阪高校→東京帝国大学文学部卒])や、教職を楽しんでいる姿勢(佐藤喜一郎[三井銀行会長、神奈川県立第一横浜中学校→一高→東京帝国大学経済学部卒])、厳しいが効果的な指導方法(大野勇[森永乳業相談役、青山学院中等部→慶応義塾大学経済学部卒])など、その教師の専門性の高さに執筆者は敬愛の情を抱いている。また、このタイプの教師もその知識や教養、または教え方の奥深さを執筆者が卒業した後に再確認するという場合が多い。

例えば、藤沢桓男は、次のように中学時代の教師を回想している。

「今宮中学で私が教わった英語の内田勇助という先生や国漢の驪城卓爾先生など、年を経るにつれて、えらい人だったなという気持ちが強くなるばかりだ。…両先生が何よりも立派だったのは、自分の専門の分野の知識と教養に関して、つまり教師としての実力の豊かさにおいて、完全に生徒たちを掌握し、生意気盛りの年頃の生徒たちに後指をさされるような弱点を微塵も持っていなかったことだ。生徒というものは、その不思議な動物的感觉によって、教師の学力を正しく見抜く場合が多いのだが、両先生の場合は、生徒の私たちを当然のことにように子供扱いにし、こちららはグウの音も出ない感じだった。『私の履歴書 文化人 第5巻』、p.522」

Ⅱ. 敬遠型

次に、敬遠される存在として回想される教師についてみてみよう。このタイプに該当する教師は、執筆者の現実感覚と合わない「理想主義的教育」を実践した校長である。校長の教育方針からよい影響を受けたと執筆者が好意的に回想する場合は、上述した敬愛型に分類されるのであるが、それとは逆に、校長への敬意は形式的に示しつつも、その教育方針に対して違和感を抱いていたことを回想したり、その教育方針から自分は距離を置いていたと回想したりする場合は敬遠型に分類される。具体的には、校長の理想主義的教育実践と「進学準備機関」としての中学校の間のギャップに対する違和感を回想する場合と、校長の理想を内面化し、「学校秀才」的に真面目に従っていたわけではないことを回想する場合の2つのタイプに大別される。

安藤豊禄（小野田セメント相談役、大分県立佐伯中学→五高→東京帝大工学部卒）は次のように当時の校長であった秦政治郎の操行点に関する理念と実際のギャップを回想している。

「秦校長は、操行点について次のような見識をもたれていた。いわく「人間の品行に甲乙丙丁」をつけるとすれば甲が最上である。最上と言えば孔子、釈迦あるいはキリストがそれに当たる。かかる聖人を甲とすれば、普通の人間は乙でも丙でもない。皆丁とすべきである。しかし、中学校で丁とすれば規則上落第にせねばならぬ。やむを得ぬので本意ながら全部丙にする」というわけである。従って第一回卒業生は全員丙であった。ところで、大正年間には高等学校に入学するのに無試験制度というのがあった。幸い私は成績の良い方であったから無試験入学の申請手続きがとられ、それは熊本の第五高等学校に提出された。成績の模様では当然無試験入学が許されると思っていたところ、不可とって来た。理由は操行が丙だからというのである。通知が来たのが五月半ば、私はそれから大あわてで七月に行われる試験の準備をした。学校では、それ以後、全員操行丙の制度を中止した。『私の履歴書 経済人 第18巻』、p.311」

一方、大佛次郎（作家、東京府立第一中学→一高→東京帝大法学部卒）は、校長の理想を内面化し、「学校秀才」的に真面目に従っていたわけではないことを次のように回想している。

「川田校長はイギリスのイートン中学を理想にして、生徒たちを厳格に規律し、野球など学校の方針として生徒に許さなかった。毎朝、全生徒を集めて体操をやらせ、冬は駆足で隊伍のまま運

動場を廻らせた。多く都会育ちの生徒だから、隠れて仲間を作って野球をしたり、禁制の亀の子焼や、汁粉屋に出入りしたりしていた。『私の履歴書 文化人 第3巻』、p.407」

また、土川元夫（名古屋鉄道社長、愛知県立第一中学→四高→京都帝大法学部卒）も愛知一中の日比野寛校長の教育方針に対して、「日比野校長は知育、徳育、体育を学ぶべき三育とし、“これに秀でることわれらの道なり”と教示された。」と回想するなかで、「しかしながら私はこの偉大な先生に数々の訓育を受けたけれども、決して先生の期待するような生徒になれなかったようだ。むしろ期待に反したものかもしれない。…一生をふり返ってみると愛知一中時代にはいろいろな訓育を受けたけれども、私の人間的なベースをつくったというより、基礎的なものを学んだ時代だったといえよう。『私の履歴書 経済人 13巻』、p.237）、中学時代の校長の教育方針に期待通りに従ったわけではないことを表明している。

Ⅲ. からかい型

教師タイプの第三は、愛着はあっても敬意は抱かれておらず、執筆者にからかいの対象として回想される教師である。このタイプの教師の思い出は、のどかでユーモアに富んだ中学の日常生活の思い出として回想される場合が多い。しかし、それに加えて、思い出には「生意気さ」や「やんちゃさ」など、執筆者や同輩の才気に富んだ様子も同時に挿入される傾向にある。

渋谷秀雄（随筆家、東京高等師範学校付属中学校→一高→東京帝大法学部卒）は、「国漢文を教える担任の大橋銅造先生には「大ガッパ」というアダ名がついた。頭に大きな皿があり、風貌もどこかカッパに似ていたからである。また「二百十日」という別称もあった。ときおりヒステリーをおこすからで、まだ台風ということばは一般に使っていなかった。…私の一、二級下の生徒数人は、あるとき校庭に「大ガッパの墓」という小さな墓標を立て、草の花など供えて拝むまねをしているところをご本人の大ガッパに見られ、二百十日に見舞われたそうである。むかしは悪意にさえユーモアがあった（『私の履歴書 文化人 第3巻』、p.34-35）」と、生徒にいたずらされてヒステリーを起こす教師の思い出を紹介している。

金丸信（衆議院議員、山梨県立身延中学→東京農大卒）のテストにまつわる教師の思い出もユーモアに富んだエピソードである。

「成績はそこそこだった。暗記が得意だったからだ。…だがどうにもうまくいかないのが数学と英語だった。ある日数学の試験でヤマをかけたのが一題も出てこない。しかもタンジェントとかコサインとか、三角とか四角とかのわけの分からない問題だ。試験官の小野軍操先生が私の答案が白紙なのをみて、「何か書け、何か書け」とせつつく。私は三角どころか、目が回りだした。ついにやむなく、「頭も丸い目も丸い、まして心はまん丸だ。四角、三角縁がない」と書いて出した。物語風にいえば、ここで先生が爆笑、「武士の情け」ですれすれの合格点をくれるのだが、現実には厳しい。私は父とともに呼び出しを受け、一週間の停学処分を食ってしまった。（日本経済新聞文化欄『私の履歴書』、1988年1月3日付）」

IV. 批判型

教師タイプの最後は、愛着も敬意もなく批判や反抗の対象として回想される教師である。このタイプの教師を描く執筆者は、自分の成績が低いために留年したことや、先生の言うことや校則に従わない問題児であった思い出を教師との相性の悪さとともに回想する傾向がみられる。良い成績をとる、校則を遵守するといった優等生的な学校的価値からはみ出していた自分を教師に対する批判・反抗の思い出とともに表明するのである。

ここで登場する教師は、校則に厳しくうるさい教師（植村甲午郎〔経団連副会長、東京府立第一中学→一高→東京帝大法学部卒〕）であったり、四角四面の教科書勉強主義の教師であったり（金森徳次郎〔国会図書館長、愛知県立第一中学→一高→東京帝大法学部卒〕）、成績の悪い自分を軽んじる教師（森繁久彌〔俳優、大阪府立北野中学→早稲田大学商学部中退〕）であったり、社会的地位の高い人物にへつらう教師（岡田卓也〔イオン名誉会長、三重県立富田中学→早稲田大学卒〕）であったり、教師の否定的な側面が強調されて描かれる。そして、これらの教師に対する回想を通じて、執筆者は学校的成功や学校的価値そのものを相対化している。

例えば金森徳次郎は、愛知一中時代の日比野校長を次のように回想する。

「先生は家庭で新聞を読んではならぬ、これは無用有害のことであり、そんなひまがあるなら教科書を勉強せよと教えられた。だが青びょうたんめいたこの小さな悪童は反抗意識をいだいて雑書を読み雑学にふけた。…堅いもの柔らかいものさまざまで、今から思うと早熟であったと思わざるを得ない。教科書勉強主義の日比野先生には相すまぬ次第であった。…物にはいろいろの考えかたもあって、後日議会でやった憲法の質疑応答にこの雑学が若干役に立っているといってくれた人もある。古事記、徒然草、土佐日記や万葉集、古今集と憲法との間に深い関係のないこともあるまい、法の本質に触れることすらあるであろう。横文字ばかりが法律と関係あるのではないのだ。（『私の履歴書 経済人 第15巻』、p.72-73）」

また、岡田卓也も、自らの中学の管理教育への批判的姿勢を社会的地位の高い人物にへつらう教師とともに次のように回想している。

「四日市の富田中学（現・四日市高校）二年生のころ、試験の成績を教室に張り出すことに私たちが反発し、紙を破り捨てたことがある。自分の組だけならまだしも、よその組の成績表を破いてしまい、父兄呼び出しと相成った。…祖父（引用者注：東京帝大農学部卒、農林技師）は袴を履き、ステッキをついて学校に現れた。すると校長先生が校庭に出てきて「美濃部先生、今日は何のご用ですか」と丁寧にあいさつしている。祖父は「実は孫が……」。私は無罪放免になった。私はなぜか序列とか上から押え込まれるような教育に違和感を覚えていた。修身の試験は、名前だけ書いて白紙で出したこともあった。少し問題児だった私は「富田の岡田」と呼ばれた。（日本経済新聞文化欄『私の履歴書』、2004年3月3日付）」

作家の佐藤春夫（和歌山県立新宮中学→慶応義塾大学予科中退）は、中学時代、武道を奨励し、文弱に流れるからと小説を読むことを厳禁した校長に反抗して、文学書にふけり学業を

怠った結果、その不良性を懲戒しようという教師の意図で中学三年時に落第させられてしまった思い出を回想している。その後慶応義塾大学に進学するものの、本科にはいかずじまいで学校をおえている。さらにその後、自分の学校時代全体を振り返るなかで、学校的価値を次のように相対化している。

「わたくしはこれでもセフルメイドマンとかいうもので、学問の贅肉は少しもついていないが、自分に必要なものはそれぞれに摂取して、筋骨を養ったつもりである——野夜郎自大と笑いたまえ。時々独学固陋のうらみはあるが、それでも学校などという牢獄には住まないで、名ばかりの学生というのんきな境涯で、青春を楽しんだ身を幸福とする。『私の履歴書 文化人 第1巻』、p.94)」

3. 4. 学校的成功と教師像

表 5. 学校歴別教師類型の内訳

学校歴	敬愛		敬遠		からかい		批判		総計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
帝大	22	66.7	4	12.1	4	12.1	3	9.1	33	100.0
官公立専門学校	9	75.0	2	16.7			1	8.3	12	100.0
私大	11	64.7			1	5.9	5	29.4	17	100.0
中卒	2	66.7					1	33.3	3	100.0
計	44	67.7	6	9.2	7	10.8	10	15.4	65	100.0

表 6. 学校歴別「敬愛型」の内訳

学校歴	個別的に可愛がってくれた教師		集団的関わりの中で後の行動指針となる言行を授けてくれた教師		授業で深い知識・教養を感じた教師		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
帝大	15	68.2	2	9.1	5	22.7	22	100.0
官公立専門学校	2	22.2	6	66.7	1	11.1	9	100.0
私大	4	36.4	6	54.5	1	9.1	11	100.0
中卒	1	50.0	1	50.0		0.0	2	100.0
計	22	50.0	15	34.1	7	15.9	44	100.0

これまで検討してきた教師像を学校歴別に示したのが表5・表6である。2つの表を見ると、回想される教師像は学校歴によってそれぞれ特徴があることがわかる。いずれの学校歴でも最も割合の高い教師像は敬愛型である。特に、官公立専門学校はこのタイプの割合が最も高く75%を占めている。ただし、それぞれの学校歴で敬愛型のさらに詳細な教師像の分布には差異がみられる。帝大は敬愛型のなかでも「個別的に目を掛け、可愛がってくれた教師」の割合が最も高く68.2%を占める。この割合は他の学校歴と比較しても顕著に高い。一方、官公立専門学校と私大は「集団的関わりの中で後の行動指針となる言葉・行いを授けてくれた教師」の割合が最も高く、それぞれ66.7%、54.5%を占める。

次に、それぞれの学校歴で、敬愛型以外の教師像の分布の特徴をみると、帝大は他の学校歴ではほとんどみられない敬遠型とからかい型がそれぞれ12.1%存在する。そして、私大は批判型の割合が29.4%と比較的高いのが特徴である。

高等教育機関の学校歴は選抜度の度合いを表しており、それは中学時の学業成績・操行の良

し悪しといった学校的成功の結果でもある。天野（1983、p.282）も指摘するように、様々な高等教育機関の間には、第一高等学校を頂点とし私立専門学校を底辺とする、進学先としての「望ましさ」の度合いによる序列がはっきりした形で存在しており、その序列は同時に選抜の厳しさの度合いの序列でもあったという。つまり、高等学校を経由した帝大が総体的に最も選抜度・学校的成功の度合いが高く、続いて官公立専門学校、私大（私立専門学校）の順に選抜度・学校的成功の度合いは徐々に低くなっていくということである。この点と教師像の学校歴別の差異を考え合わせると、このような学校歴別の教師像の差異は、執筆者の「優等生＝学校的成功」との距離をめぐってあらわれているとみることができる。

帝大出身の執筆者は学校的に最も成功しており、中学時代は向学校的な成績の良い優等生であった者が多い。すると教師から目を掛けられる存在になる可能性も高く、また逆に自らも良い教師を積極的に求めようとする可能性も高い。したがって、敬愛型のなかでも個別的に可愛がってくれた教師の割合が最も高くなったと考えられる。一方で、「優等生」は時に「学校秀才」とも呼ばれるように、学校時代に先生のいいなりになって勉強し、その結果勉強ができただけで、実社会に出て役立たないと見なされる場合も少なくない。そのような社会的まなざしに対する対抗戦略として、帝大出身者で敬遠型・からかい型の教師の割合が他の学校歴のものよりも比較的高くなったと考えられる。

同様に、官公立専門学校・私大出身の執筆者は、敬愛型のなかでも集団的な関わりのなかでその後の行動指針となるような言葉・行いを授けてくれた教師の割合が高いという傾向も、学校的成功の度合いとの関連性から説明できる。官公立専門学校・私大出身の執筆者で優等生であったと自分を語るものは少ない。むしろ、「（成績は：引用者補足）七、八番程度だった（中安閑一〔宇部興産社長、山口県立山口中学→東京高等工業学校卒〕）」、「中学時代もとりたてていほどのことはなかった。学科も特に得意なものはなかった（伊藤次郎左衛門〔松坂屋社長、愛知県立第一中学→慶応普通部→慶応義塾大学法学部卒〕）」、「私は平凡な生徒であったと思う（宇佐美洵、経歴前掲）」というように、成績が特に良かったわけではないことを語る場合が多くみられる。中学時代に成績が特に優れているわけではないこれらのケースは、教師との関係が成績優秀者ほど密接でなかったことが推察される。よって在学中に教師との個別的な思い出はあまりなく、教師の思い出を語る場合も、在学中の集団的な関わりのなかで得た教師の言葉や教育方針のありがたさを卒業後に再認識するといった回想パターンになるケースが多くなるものと考えられる。

さらに、批判型の割合が私大出身者で約3割と他の学校歴に比べると相対的に高かったことも、私大出身者が学歴エリートのなかでもっとも学校的成功からの距離が遠いためであると解釈できる。批判型の教師像を回想する執筆者は、中学時代の教師に対する批判・反抗の思い出とともに、自分の成績が低いために留年したことや、先生の言うことや校則に従わない問題児であった思い出、つまり良い成績をとる、校則を遵守するといった優等生的な学校的価値からはみ出していた思い出も回想していた者が多かった。そして、そのような中学時代を過ごした結果、私大に進学することになるのである。しかし、学校的成功からの距離は遠かったとしても、その後彼らは学校をおえた後に『私の履歴書』の執筆者となるほどまでに社会的に成功している。そのようになった後に中学時代を振り返った時には、学校的成功の重要性は低下し、

それを相対化することが可能となる。そのなかで学校的成功と関係が深くその奨励者である教師は批判の対象となって回想されることになると考えられるのである。

4. おわりに

本稿では『私の履歴書』から、思い出のなかに描かれる中学教師像を、主に学歴エリートに注目して、量的・質的に検討してきた。本稿で得られた知見をまとめると次のようになる。

まず、全体的に中学教師の思い出の有無を検討した場合、中学経験者の約6割が何らかの中学教師の思い出を記述していた。ただし、中学教師の思い出を記述するかどうかには、属性ごとに差異があることが明らかになった。職業別にみた場合は、専門職で中学教師の思い出を記述する割合が高い一方、官僚や政治家ではその割合は低かった。また学歴別にみた場合には、高等教育の方が中等教育よりも中学教師の思い出を記述する割合が高かった。さらに、掲載年が下るにつれて中学教師の思い出を記述する割合は低くなっていくことが明らかになった。

次に、分析対象を「自伝に登場する先生のうち、最も厚い思い出の記述がされている教師が特定の中学教師である」65 ケースに限定して、主に高等教育に進学した学歴エリートを中心に中学教師との思い出の内容分析を行った。その結果、教師に対する敬意と愛着の有無によって、「敬愛型」、「敬遠型」、「からかい型」、「批判型」の4つの教師像が抽出され、なかでも「敬愛型」の割合が最も高いことが明らかになった。加えて、「敬愛型」は教師との関わりが個別的か、集団的かということと、伝達された知が学問知か暗黙知でさらに「個別的に目を掛け、可愛がってくれた教師」、「集団的な関わりのなかで、その後の行動指針となるような言葉・行いを授けてくれた教師」、「授業において深い知識・教養を感じた教師」の3つのタイプに分かれた。

そして、それぞれの教師タイプは、高等教育機関の学校歴によって偏りがみられ、それは執筆者の「優等生＝学校的成功」からの距離をめぐってあらわれているものであると解釈することができた。

今後は、分析対象を広げたり、分析に時間軸を入れて変化の相に注目したりするなどして、より深く旧制中学における教師―生徒関係の分析を進めていくことが課題である。

〈注〉

- (1) 旧制中学の教師との思い出が記述されているケースは後にも示すように 234 ケースあったが、234 ケースのなかには、「中学時代にどの教科は何先生に習った」というように、関わりのあった先生を簡単に紹介するにとどまり、内容分析に耐えられないと判断せざるをえないケースも多かったため、内容分析は「自伝に登場する先生のうち、最も厚い思い出の記述をされている教師が特定の中学教師」である 65 ケースに限定して行った。この条件に該当する教師には、①自己形成に与えた影響の大きさ、②語りやすさ、③語ることの（社会的）意義の大きさの三つが備わっており、教師は自分にとってどのような存在かということを最も典型的に表す存在といえると考えられる。

- (2) 65 ケースのうち、中等教育卒は3 ケースと少ない。よって、以降の分析に際してはこの3 ケースは参照するにとどめ、主に高等教育に進学した 62 ケースを中心に分析を行い、学歴エリートの中学教師像を検討して行くこととした。65 ケースのデータの概要を下表に示す。

付表. 最多記述＝中学教師のデータの概要

変数	N	最多記述＝中学教師	%	変数	N	最多記述＝中学教師	%
掲載時年齢				本人職業			
90代	5	0	0.0	会社経営者	183	36	19.7
80代	71	11	15.5	専門職	61	3	4.9
70代	211	40	19.0	芸術・芸能	53	8	15.1
60代	92	11	12.0	文筆	50	11	22.0
50代	10	3	30.0	政治家	26	3	11.5
計	389	65	16.7	官僚	16	4	25.0
出生年				計	389	65	16.7
1871-90	57	11	19.3	出身階層			
1891-10	164	32	19.5	上	67	6	9.0
1911-30	153	21	13.7	中の上	229	43	18.8
1931-50	15	1	6.7	中の下	75	13	17.3
計	389	65	16.7	下	8	2	25.0
掲載時期				不明	10	1	10.0
1956-1975	155	34	21.9	計	389	65	16.7
1976-1995	149	21	14.1	最終学歴			
1996-2008	85	10	11.8	高等教育	360	62	17.2
計	389	65	16.7	中等教育	29	3	10.3
出身地				計	389	65	16.7
東京	116	22	19.0	高等教育：大学			
地方大都市部	37	6	16.2	帝大	219	33	15.1
地方市部	89	15	16.9	官公立専門学校	61	12	19.7
地方郡部	147	22	15.0	私大	80	17	21.3
計	389	65	16.7	計	360	62	17.2

データの特徴は主に次の3点である。第一には、出生年・掲載年いずれにおいても最多記述が中学教師であるケースの割合は時代が下るにつれて低下している点である。第二には、職業別にみた場合、会社経営者、文筆、官僚で最多記述が中学教師であるケースの割合が約20%で他の職業よりも比較的高い一方で、専門職はその割合が約5%と非常に低い点である。第三には、高等教育機関に進学したケースを学校歴別にみた場合、帝大→官公立専門学校→私大の順に選抜度が低くなるほど、最多記述が中学教師であるケースの割合が高くなっている点である。

〈引用・参考文献〉

- 天野郁夫、1982、『教育と選抜』、第一法規出版。
 ———、1983、『試験の社会史 —近代日本の試験・教育・社会』、東京大学出版会。
 麻生誠、1991、『日本の学歴エリート』、玉川大学出版部。
 深谷昌志、1969、『学歴主義の系譜』、黎明書房。
 ———、1974、「中等教育」、国立教育研究所編、『日本近代教育百年史 第四巻』、教育研究振興会。
 稲垣恭子、2011、「アカデミック・コミュニティのゆくえ」、稲垣恭子編、『教育文化を学ぶ人のために』、世界思想社、pp.245-263。
 ———・濱貴子、2013、「財界人・文化人の「師弟関係」 —『私の履歴書』の分析から—、

- 『京都大学大学院教育学研究科紀要』、第59号、(掲載決定済、印刷中)。
- 石川松太郎、1991、『教育の歴史』、放送大学教育振興会。
- 石岡学、2008、「生きられた「学歴エリート」の世界——学歴社会黎明期における高学歴男性の教育経験——」、小山静子・太田素子編、2008、『「育つ・学ぶ」の社会史——「自叙伝」から』、藤原書店、pp.179-233。
- 唐沢富太郎、1955、『教師の歴史 教師の生活と倫理』、創文社。
- 菊池城司、1967、「近代日本における中等教育機会」、『教育社会学研究』、第22集、pp.126-147。
- 小山静子・太田素子編、2008、『「育つ・学ぶ」の社会史——「自叙伝」から』、藤原書店。
- 斎藤俊彦、1995、『競争と管理の学校史——明治後期中学校教育の展開』、東京大学出版会。
- 武石典史、2012、『近代東京の私立中学校—上京と立身出世の社会史—』、ミネルヴァ書房。
- 竹内洋、1991、『立志・苦学・出世——受験生の社会史』、講談社。
- 、1996、『立身出世と日本人』、NHK 人間大学。
- 、1999、『学歴貴族の栄光と挫折』、中央公論新社。
- 寺崎昌男、前田一男編、1993-1994、『歴史の中の教師 1、2』、ぎょうせい。
- 米田俊彦、1992、『近代日本中学校制度の確立——法制・教育機能・支持基盤の形成』、東京大学出版会。
- 、1994、『資料にみる日本の中等教育の歴史』、東京法令出版。